

杉山隆彦教授略歴・主要研究業績

略 歴

- 一九三二年 二月一八日 旧満州国安東市山手町二三番地に生まれる。
- 一九三五年 父良市（三七歳）、母つねを（二六歳）、長姉しげ子、次姉千鶴子。三月、弟正彦生まれる。
- 一九三六年 父陸軍入隊のため、家族全員帰国、静岡県引佐郡井伊谷村横町（現引佐町井伊谷）に居住。父除隊、南満州鉄道株式会社に復職のため、家族全員再び渡満。ハルビン市南崗区車站街一〇番地に居住。翌年二月、妹英子生まれる。
- 一九三八年 四月 ハルビン花園小学校入学。（のち一九四一年、学制改革のため、ハルビン花園国民学校となる）
- 一九四一年 九月 父、転勤のため、奉天市大和区紅葉町一四番地に転居。奉天葵国民学校四年に転入学。柳橋実、脇谷英雄、長浜（旧姓稲見）和雄、川原孝子らとの交遊は今日まで続く。
- 二月 太平洋戦争（大東亜戦争）勃発。
- 一九四三年 一月、妹桂子生まれる。

一九四四年三月 奉天葵国民学校卒業。

四月 奉天第一中学校入学。

一九四五年八月 敗戦。父失業。奉天第一中学校廃校。一二月妹英子死亡。

一九四六年九月 引き揚げ帰国。父の故郷静岡県引佐郡奥山村枳窪三六番地に一時滞在の後、同県同郡井伊谷村横尾一一〇八番地に居を定める。静岡県立浜松第一中学校に編入学。細谷昌次、鈴木雄三、大谷寛治、宇波彰らを知る。太田芳三郎先生に英語の基礎を教えこまれる。

一九四八年四月 学制改革ため、静岡県立浜松北高等学校一年となる。校内誌『一里塚』にエッセイ、短編小説を寄稿する。

一九五一年三月 同校卒業。

四月 東京外国語大学英米学科入学。中野区上高田の日新学寮に居住。山田元春（中国語）、中村

博（スペイン語）、渡部英哉（ポルトガル語、故人）、岡野次男（英米語）と同室。

岩崎民平、佐々木達、安藤一郎、小川芳男、梶木隆一、乾亮一の諸先生から英語・英米文学研究の手ほどきを受ける。

一九五三年 若林俊輔、佐瀬稔（一九九八年五月死亡）らとともに文芸同人誌『カオス』を発行し、みずからは小林秀雄論、福田恒存論をはじめ、精力的に批評活動を進める。高島誠（故人）が当時すでにテニス、スキーに熟達しているのを知り、羨望の念に駆られる。佐々木みよ子、中村（旧姓元持）恭子、その他、得難い友人に恵まれる。

龍口直太郎先生の指導でアメリカ文学の面白さに開眼する。

一九五四年

安藤一郎先生のゼミナールで卒業論文を作成、年末に提出する。

『The Pilgrimage of John Steinbeck: On the Road to East of Eden』

同人誌『カオス』にユードラ・ウェルティ「愛の訪問」(“A Visit of Charity”)を翻訳掲載する。

その間、一〇月に成城学園高等学校で教育実習を行なう。この時、生涯の師と仰ぐことになる小野嘉寿男先生と出会う。

一九五五年 一月

女性教員産休の補充教員として、東京外国語大学学生の身分のまま、非常勤講師として成城学園高等学校で英語を担当する。(二月まで)

三月

東京外国語大学英米学科・語学文学専修課程を卒業。

四月

成城学園高等学校教諭となる。樽田真、岡本寿賀子、大平金次郎、吉住元広、今井一、八木敏雄、山口静一の諸氏と親交を結ぶ。

一九六〇年 一月

静岡県浜北市在住の永井美智子と結婚。天理教井伊谷分教会において教会長木下幸永・みゆき先生ご夫妻の司式で挙式。

東京都世田谷区世田谷四一四七八 南平荘に居を定める。

四月

六月末まで肺門淋巴腺炎のため関東中央病院にて入院治療。

一九六一年 一〇月

長男太郎誕生。

一九六二年 四月

亜細亜大学教養部非常勤講師となる。

一九六三年 九月

東京都世田谷区経堂町七七六番地に転居。

二月 次男健介誕生。

一九六四年 八月 天理教本部（奈良県天理市）にて別席——〇席——を全うし、よふぼく（用木）となる。

一九六五年 七月 八月まで、学習研究社主催のアメリカ研修旅行の引率教師として、滝澤英雄氏とともに始めて外遊する。

二月 東京都町田市本町田住宅イ—五五二に転居。

一九六六年 三月 成城学園高等学校退職。

四月 茨城工業高等学校専任講師となる。茨城県勝田市（現ひたちなか市）中根枯松戸二九九

〇の三の官舎に居住。飯島昭（数学、故人）、川村安宏（英語学）、雨宮隆雄（日本文学）、免取慎一郎（倫理学）、鈴木暎一（歴史学）の諸氏と親交を結ぶ。

一九六八年 三月 同高等学校退職。

四月 成城大学短期大学部専任講師となる。東京都町田市本町田住宅イ—四三六に転居。安田一郎氏（故人）と出会い、親交を深める。

明治学院大学非常勤講師となる。大学生の造反運動が猖獗を極め、そのありさまをまのあたりにする。

日本英文学会会員となる。（一九七八年まで）

日本アメリカ文学会会員となり、現在に至る。

一九七二年 四月 成城大学短期大学部助教授に昇任。

東京外国語大学外国語学部非常勤講師となる。

- 一一月 父良市死亡（肺気腫）。享年七七歳。
- 一九七二年 三月 明治学院大学非常勤講師を辞す。
- 神奈川県相模原市相模台五―二―三―三〇四に転居。
- 青山学院大学文学部非常勤講師となる。
- 一九七三年 四月 海外研修のため、東京外国語大学外国語学部非常勤講師および青山学院大学文学部非常勤講師を辞す。
- 八月 成城大学海外研修員として、オレゴン州立大学英文学科に留学。同学科内に研究室を得て、リチャード・アストロ教授のもとで、ジョン・スタインベック研究に携わる。
- オレゴン州コーヴァリス市ノースウェスト二三番地メサ・アパートメントに居住。
- 国際スタインベック協会会員 (The International Steinbeck Society) となり、現在に至る。
- 帰国。同時に、母つねをを迎えて同居となる。
- 一九七五年 七月 亜細亜大学教養部非常勤講師を辞す。
- 一九七六年 三月 東京外国語大学外国語学部非常勤講師に復職。
- 四月 NHK教育テレビ英語会話講座 “English for Tomorrow” 担当講師となる（一九七九年三月まで）。マーシャ・クラカワーを知る。
- 水城学園（福岡市）英語科講師を兼務する（一九八九年三月まで）。
- 日本スタインベック協会発足とともに、理事に就任、現在に至る。
- 一九七七年 五月 成城大学法学部助教授に移籍。寿田龍輔、中川和彦、横川新、西崎愛子、金沢公子らを知る。
- 一九七八年 四月

一〇月 東京都町田市成瀬台四―四―一に転居。

一九七九年 四月 成城大学法学部教授に昇任。

成城学園教育研究所所員兼編集委員となる。(一九八一年三月まで)

一九八三年 四月 成城大学法学部一般教育主任となる。(一九八九年三月まで)

七月 八月にかけて、米国インディアナ州ボール州立大学スタインベック・リサーチ・インスティテュートの客員研究員となる。

一九八七年 四月 中央大学法学部非常勤講師となる。(一九九八年三月まで)

一九八八年 六月 日本英語表現学会理事となり、現在に至る。

一九八九年一〇月 成城大学評議会評議員となる。(一九九六年一〇月まで)

一九九三年 五月 日本ヘミングウェイ協会会員となり、現在に至る。

一九九四年 九月 母つねを死亡(老衰)。享年八九歳。

一九九五年 四月 成城大学L.L.Senator長となる。(一九九七年三月まで)

東海大学文学部非常勤講師となり、現在に至る。

五月 日本スタインベック協会会長に選出される。

一九九六年 四月 実践女子大学大学院文学研究科非常勤講師となり、現在に至る。

一九九七年 一月 特別最終講義「ジョン・スタインベックの《作業手続き》―真実をどう捉えようとしたか―」を行なう。

三月 第四回国際スタインベック会議の副議長として運営に当たる。(米国カリフォルニア州サン

ノゼおよびモンテレイにて三月一九日より二三日まで開催。

三一日をもって成城大学を定年退職。

四月 一日、成城大学名誉教授となる。

五月 日本スタインベック協会会長に再選される。

主要研究業績

著書

- ① 『リリアン・ロス―ヘミングウェイの肖像』(東京―博英社、一九六九)
- ② *Essence of English Composition 1* (東京―開隆堂出版、一九七二)(共著)
- ③ *Essence of English Composition 2* (東京―開隆堂出版、一九七三)(共著)
- ④ *Essence of English Composition 3* (東京―開隆堂出版、一九七四)(共著)
- ⑤ 『英語―語彙・語法・イディオム』(東京―研究社出版、一九八九)
- ⑥ 『ジョン・スタインベック―「収穫のジプシー」』(東京―研究社出版、一九九二)
- ⑦ 『英語―語法・イディオム・文整序』(東京―研究社出版、一九九四)
- ⑧ 『論文・レポートを書くための―アメリカ文学ガイド』(東京―荒地出版社、一九九六)(共著)

論 文 (単行本所収)

- ① 「La Santa Roja」とは誰か—スタインベックの想像力の限界」(『ホレーシオへの別辞—詩人教授安藤一郎記念論文集』、東京—文理、一九七二)
- ② “Steinbeck Criticism: Present and Future” (*John Steinbeck: East and West*, Muncie, Indiana: The International Steinbeck Society, 1978)
- ③ 「不易」と「流行」(『英語教育人は提言する』、東京—開隆堂出版、一九七八)
- ④ 「もっと回数を」(『英語教育人は提言する』、東京—開隆堂出版、一九七八)
- ⑤ 「スタインベック批評—現在と未来」(『ジョン・スタインベック—東洋と西洋』、東京—北星堂書店、一九八一)
- ⑥ 「不易」と「流行」(『英語教育の談話室』、東京—開隆堂出版、一九八三)
- ⑦ 「テキストのよろこびを」(『英語教育の談話室』、東京—開隆堂出版、一九八三)
- ⑧ “Cannille Oaks, a Heroine of Nonsense: A Reassessment of *The Wayward Bus*” (*John Steinbeck: From Salinas to the World*, Tokyo: Gaku Shobo, 1986)
- ⑨ 「ノンセンスのヒロイン、カミーユ・オークス—『気まぐれバス』を再評価する—」(『ジョン・スタインベック—サリーナスから世界に向けて—』、東京—旺史社、一九九二)
- ⑩ 「作業手続き—としてのプレイ・ノベレットとカメラ・アイ」(『スタインベック・作家作品論』、東京—英宝社、一九九五)

論 文 (学会誌・學術雜誌・紀要・その他定期刊行物所収)

- ① 「アーネスト・ヘミングウェイ論事始め」(『英語・研究と教授』第二号、東京―東京外国語大学教授法研究会、一九六二)
- ② 「高校英語教育においてシエークスピアをいかに扱うべきか」(『私学研修』第二五号、東京―私学研修福祉会、一九六四)
- ③ 「アーネスト・ヘミングウェイの小説作法」(茨城高専『研究彙報』第二号、茨城県勝田市(現ひたちなか市)―茨城工業高等専門学校、一九六七)
- ④ 「アーネスト・ヘミングウェイ論・そのⅢ―孤立者の世界―」(茨城高専『研究彙報』第三号、茨城県勝田市(現ひたちなか市)―茨城工業高等専門学校、一九六八)
- ⑤ 「For Whom the Bell Tolls 覚え書」(『英語・研究と教授』第六号、東京―東京外国語大学教授法研究会、一九六九)
- ⑥ 「『黄金の杯』―スタインベック論事始め―」(成城大学短期大学部『紀要』第一号、一九七〇)
- ⑦ 「スタインベックの虚像と実像」(成城大学短期大学部『紀要』第二号、一九七二)
- ⑧ 「文学の立場から」(『英語教育』九月号、東京―開隆堂出版、一九七二)
- ⑨ 「欲張らないことが大切」(『英語教育』五月号、東京―開隆堂出版、一九七三)
- ⑩ 「アーネスト・ヘミングウェイの小説―小説論の試み―」(成城大学文芸学部・短期大学部創立二〇周年記念論文集(外国文学編)、東京―成城大学、一九七四)
- ⑪ 「カリフォルニアのオーキーズ―怒りのぶどう―理解の一助として―」(成城大学短期大学部『紀要』第八

号、一九七七)

⑫ 「英米の作家をたずねて—John Steinbeck」(『NHK英語会話初級テキスト』一月号、東京—日本放送出版協会、一九七八)

⑬ 「英米の作家をたずねて—Ernest Hemingway」(『NHK英語会話初級テキスト』三月号、東京—日本放送出版協会、一九七八)

⑭ “The Education of Jim Nolan: An Aspect of *In Dubious Battle*” (成城大学短期大学部『紀要』第九号、一九七八)

⑮ 「シルマリオン」(『えぶりわん』第二号、東京—国際教育協議会、一九七八)

⑯ 「パパ—私的メモワール」(『えぶりわん』第三号、東京—国際教育協議会、一九七八)

⑰ 「テレビ・ラジオの英会話講座」(『時事英語研究』十一月号、東京—研究社出版、一九七八)

⑱ 「ひよわな牧歌、あるいは現代病理所見—『天の牧場』論—」(成城法学『教養論集』第一号、一九七九)

⑲ 「私の聴き取り訓練」(『英語教育』二月号、東京—大修館書店、一九八〇)

⑳ 「マクロの文学—グロテスクとノンセンス—」(成城法学『教養論集』第三号、一九八二)

㉑ 「牧歌の検証—『赤い小馬』と『長い平野』—」(成城法学『教養論集』第四号、一九八四)

㉒ 「反文化のエネルギー—アメリカ文化の型」(『成城文芸』第一〇七号、一九八四)

㉓ 「牧歌の復権—『知られざる神に』と『トーティヤ台地』—」(成城法学『教養論集』第六号、一九八六)

㉔ 「スタインベック文学事典への試み」(成城法学『教養論集』第七号、一九八八)

㉕ 「モダニスト・スタインベック—マクロの文学・その二」(成城法学『教養論集』第八号、一九九〇)

㉖ 「潮だまりの生態学—スタインベックの自然観—」(成城法学『教養論集』第一〇号、一九九三)

②⑦ 「プレテクトからテクトへ」(『プレティン・英語表現研究』第二八号、東京―日本英語表現学会、一九九

六)

辞典・事典執筆

- ① 『シニア英和辞典』(小川芳男編に項目執筆、東京―旺文社、一九六四)
- ② 『シニア和英辞典』(小川芳男編に項目執筆、東京―旺文社、一九六六)
- ③ 『中学英語指導法事典』(稲村松雄編に項目執筆、東京―開隆堂出版、一九七六)

学会賞受賞

- ① 「国際ジョン・スタインベック学会・編集貢献賞」(一九九一年五月)
- ② 「ジョン・J十アンジェリン・R プルーイス賞」(一九九七年 夏)

